大地

第　５０　号
2015.9.24.発行
浄　國　寺
上越市寺町3丁目14-10
☎025-523-5724

【俳句】

山崎　睦

遅れたる夫の忌修す秋彼岸

枝紅葉くぐりてよりの阿賀下り

野仏に供えてありし栗一つ

焚く他に処置なき嵩の落葉かな

鴉には鴉が応え夕時雨

おかげ様てふよき言葉冬日和

老いるだけ老いし身正し初灯

（平成十五年　作―八十七歳）

会話の流れの話

山崎隆史

去る八月七日に浄國寺で行われた、盂蘭盆会永代読経及び戦争犠牲者追悼法会での、父隆昌の法話に関する事です。父に後であきれられたくらい、違う事を考えていたのですが、その考えた事を少し書こうと思います。

法話の中で、面接で若者に「大切なもの」を質問したところ、家族とか友人といった答えが返ってくると思っていたら、財布、携帯電話、パソコンといった即物的な答えが返ってきて驚いた、というエピソードが紹介されました。人と人との縁というものが薄くなり、物質的なものばかり重視される社会になってきた、という事の一例として挙げられていて、その事自体には同意する所ですが、エピソードに対しては私は違う事を考えました。

１９８０年代だかの心理学の実験で、英語と日本語の両方を母国語同様に話せる人を集めて二つのグループに分け、一方には英語で、もう一方には日本語で「大切なもの」を質問したところ、英語のグループの方は「家族」と答えた人が多く、日本語のグループの方は「仕事」と答えた人が多かったそうです。実験の解釈としては、使う言語が思考に影響する、という事のようです。

「いただきます」「めしあがれ」、「ツマラナイモノですが」「これはケッコウナモノを」といった遣り取りは外国語に直訳しても意味が通らないのです。夏目漱石が英語教師をやっていた時、「アイラブユー」を「我君を愛す」と訳した生徒に「日本語ではそんな言い方はしない、月が綺麗ですね、くらいでよろしい」と言ったというエピソード（後の創作ともいわれる）は、現代で通用するかどうかはともかくとして、言語または文化によって通用する言い回し、会話の流れがあるという事なのです。

面接の「大切なもの」のエピソードも、若者たちにとっては、財布とか携帯電話といった即物的な答えをすべき会話の流れだったという事なのではないでしょうか。

「若者の言葉の乱れ」は何十年も前から常に言われる事で、私が二十代前半の頃も、十代の若者がやり玉に挙げられていました。この時、若者（四、五歳しか違いませんが）の使う言葉の単語の意味は知っていても若者同士の会話のリズムとか流れが自分の理解の外で、言葉の意味は分かるのにまったく会話について行けず、背景とする文化が違うと感じました。昔は文化の違いは地域ごとの差が大きかったのが、世代ごとの差、趣味・職業・家族構成（子供の年齢など）の差など、様々な事が大きな違いとして現れるようになったのでしょう。

日光林間学校の三日間①

町田市　久保みなつ（六年）

私の通っている町田市の小学校は、六年生になると夏休みに二泊三日の日光林間学校がある。

六年生になった私は、七月二十一日から三日間の日光林間学校に行った。不安なことも多かったが、とても楽しかった。その感想をここに載せていただけることになったので、読んでいただければ嬉しいです

《一日目　七月二十一日》

【日光東照宮】

日光は杉の木が多く、東照宮にも生い茂っていた。東照宮はお墓であることを忘れてしまうような豪華さだ。陽明門が修理中なのはとても残念だったが、壁の内側に描かれていたらしい絵は見ることができた。

東照宮に行くには、段差のある階段を登ったり降りたりしたが、階段はとてつもなく長いうえ、他の学校の人も来ていてなかなか登れず、人に酔ってしまった。

けれど、眠り猫や三猿、鳴き竜などの歴史に触れることが出来て良かった。

【華厳の滝】

日本三名瀑、華厳の滝に到着。この日は少し暑かったが、滝の近くまで来るととても涼しかった。水飛沫の量が物凄く、霧雨のようで、近くの売店では商品にビニールが掛けてあり、レインコートを販売していた。

私は滝を見るのが初めてなので、とても感激した。

華厳の滝は、テレビや写真等でよく見るが写真だけでは、その迫力は全く伝わらないと思った。

滝だけではなく滝壺やそこからの流れ、滝の流れ始めや岩壁、みな美しく素晴らしく、いくら見ても見尽くせない。さすが三名瀑、

【キャンプファイヤー】

去年の川上村林間学校の時もキャンプファイヤーの予定があったのだが、雨が降ってしまい中止になってしまった。今年は夜雨も降らずキャンプファイヤーが無事出来た。

練習が少なかったので円形に並ぶところから上手くいかず、トラブルもあったようで大変だった。

「ジェンカ」という、グループでじゃんけん列車のようにくっついて動き回る奇妙な遊び（？）をしたのだが、私がつかまっていた子は調子に乗ってどんどん行ってしまうので、私は手を離してしまうし、その子が火の近く行こうとするものだから火の粉が目の前で舞い上がり、私につかまっていた子がおびえていた。フリスビーを使って爆弾ゲームもしたのだが、私に渡す子がフリスビーをちらつかせ「ほしいかね？」と意地悪をしてきたので腹が立ってひったくって取ったら、その子はずっと「わぁーひったくられた」と言っていて、私に「久保って、意外と力強いんだね」と言って来た。「意外」は余計だが

最後はみんなでろうそくを持ち、運動会の組体操で流した曲を歌い、良い雰囲気で終わった。

みなつさんは、川崎さんの可愛いお孫さん。本が大好き、枕草子のような古典を好んで読まれる将来楽しみな文学少女です。

生家そしてふるさと

山崎　隆昌

浄國寺参道から庫裡玄関に至る道の両脇に木槿（むくげ）の木が植えられている。夏になると、うす紅を淡くさした白い花が咲き目を楽しませてくれる。

木槿の花は椿の花のように、花がそのままにボトボトと下に落ち、落ちた花は日が経つにつれぬめりが出て来て、舗装の道や地面にやたらくっ着き始末が悪い。雨に当たると余計に粘着性が増す。そこで、早朝落ちた木槿の花を拾い集めるのが私の仕事。雨の日は傘をさしながらである。このように書くと何か特別の事のようだが何のことも無い、朝起き

がけの気晴らしに過ぎない。

草花のことはとんと音痴な私が、木槿のことを知ったのは、ひょんな事からだ。

三十年ほど前になるか、旧新井市小出雲の入村さんの法要でのこと。この法要の引き出物は、立派な雲版（うんぱん）であった。この雲版にはすでに色紙が収められていて、あざやかな墨跡で次の句が書かれいた。

老いてなほ　生家なつかし　花木槿

朝日新聞俳壇に入選された句であるという。頂いた雲版は、家にある色紙を取り替え引き換えし、現在も活躍中。

ところでこの度、花木槿の句を思い出し色紙を捜すけれど見当たらない。何処へしまい込んだものか分からない。古希を超え、益々失せ物捜しの時間が多くなってきた。

従って前記の句は、私の記憶にあるもので、正しい色紙の句とは字句等で違いがあるかも知れぬ。ご容赦のほど。

生を受け、年頃になり縁あって嫁ぎ、子をもうけ、やがて孫にも恵まれ、齢を重ね重ね老いたる身であるが、なお生家が懐かしいと詠まれる。

生家で過ごした時間の数倍の長い時を刻み、夫婦、親子、親戚、近所等、人とのつながりにも広く深いものがあるのだが、生家への思いはいつまでも続く。否、強まるのかも。

老人ホームに勤務していた頃、認知症の進んだ利用者が「家に帰りたい」と訴える。聞けば、彼女の帰りたい家は、住み慣れた嫁ぎ先では無く生家であった。認知症は新しい記憶から失っていく病であるから当たり前と言えば当たり前だが、不思議なものを感じた。

私は四人兄弟で、姉弟三人は茨城、埼玉、奈良と生家から遠くに住んでいる。彼らは生家をどのように感じているのだろうか。

妻は隣県山形酒田市の生まれ、「不思議なものね、今の生活がどうのこうのではなく、全く別のところで生家ってなつかしいものだもんね」と話す。

歳を重ねてから生家に心懐かしさを感じるのは、今の自分の原点、以前に流行った言葉なら、今の自分のルーツをそこに見ているのかもしれない。命のつながりのような

生家と同じような響きを持つ言葉に故里がある、ふるさと懐かしである。

ふるさとの訛なつかし停車場の
人ごみの中にそを聴きにゆく　石川啄木

ふるさとの母が称なふる念仏の
耳の底よりわれをいざなふ　吉野秀雄

ふるさとの山や川、父母そして友人、食物言葉の訛り、町並みや遊んだことまで、その一つ一つがなつかしく、郷愁の世界にいざなうものがある。

大仰な言い方をすれば、これら一つ一つは、ふるさとの文化だ。その地における自然と長い歴史のなかで創りあげられた地方の文化であると思う。

本年は戦後七十年に当たるが、ふるさとの姿はこの七十年ですっかり変わった。変わりの根底に地方文化の疲弊あるいは崩壊があると思う。

『限界集落』の言葉のように、都市部への異常な集中がある。東京、神奈川、埼玉千葉の四県で日本全人口の二十八％であり、新潟県全人口の三割は新潟市の住人である。

地方では高度成長期には工場誘致を熱心におこない、今は観光産業に力が入る。

現在「地方創生」とか「ふるさと納税」等地方活性化の策が様々にいわれているが、つまりはお金の事に終始している。、

私たちは、ミニ東京や大阪ではなく、その地において生まれ育まれた、自然や産業、言葉、人間関係、町並み等のふるさとの文化に目を向けたいものだ。

心から「生家は懐かしい」「ふるさとはいいなぁ」と言えるような。

ワン公物語⑪

―華のつぶやき―

山崎 華（愼子代筆）

私は華。パグ犬の雌。八才になった。

二年前の夏、蓮姉ちゃんが突然いなくなって日に日に寂しさが増していった。あろうことか私は気が付くとお漏らしをするようになっていた。その都度母さん達はタオルやマットを換え洗濯をして「この子どうしたんだろうね」とぼやいている。私にしても気が付くと粗相してしまっているので、どうにもコントロールができなかったのだ。

一年余りそんなことが続いて、蓮姉ちゃんの居ないことにも慣れて来た頃「そう言えばこの頃、華の粗相が無くなったわね」と母さんに言われ、一人ぼっちに慣れてきている自分に気付いたのだった。

そうなってみると、今度は隣の部屋のことが気になるのである。隣の部屋は台所兼居間。三度の食事、お茶の時間、親しい人がくつろいで行くのに、私はその賑わいの音を隣のワン公部屋で、ただ聞いているだけ。何が楽しいのかなァ。お茶だろうか？コーヒーかも。全くカヤの外、寂しさとつまらなさがつのる。

ある日私はとうとう実力行使に訴えた。でも脱走ではない。父さんに体当たりして、精一杯鼻を鳴らしてみたのだ。何度も何度も。そしたら父さんてスゴイ！私の気持ちが分かったのだ。「しょうがないなァ」と言って私を抱き上げ、台所の椅子に坐らせてくれた。

働いている母さんが見える。私は椅子に伏せたまま目だけ動かしてその様子を眺める。「意外に良い子にしているのね。時々連れてきても大丈夫ネ」だって。ウレシイナァ。

私専用の椅子も置いてくれて居場所を貰い、近頃では蓮姉ちゃんのことでクヨクヨすることも少なくなったみたい。でも蓮姉ちゃん、すっかり忘れたりはしないからね。

ところで蓮姉ちゃん、父さんは近頃、日曜大工にはまっているんだよ。母さんの話では元々好きであったらしいのだけど、この夏の熱の入れ方はかなりのものだったんだ。はじめ母さんは少しヤレヤレと思ったみたい。だって父さんは結果を急ぐ余り、寸法を測るのが大雑把だったり、釘を打ち損ねて「チクショー」と叫んだり、そこが母さんとしてはたまらなかったそうな。

キッカケは、父さんの姉さんが送ってくれた大量の書道紙だった。父さんはすっかり嬉しくなり、紙の置き場所と入れ物を思案した。結果「よし、自分で作ろう！」と思いたったのだ。父さんは過去の教訓から、まず寸法を慎重に測り図面を描き、そしていそいそとホームセンターに出かけた。作業は秘めやかに進められ、たまに「ンー」とか「ハー」とか言う声は洩れてきたけれど順調に進んだらしい。今度の仕上がりは結構満足のいくものだったらしく、母さんからのクレームも一切なし。

気を良くした父さんは、台所にCDの棚を作り、土間の踏み板を工作し、その勢いは私の所にまで及んでしまった。

私のワン公部屋にはジョイント式のマットが敷きつめてある。それを母さんが時々交換して洗ってくれるのだけれど、交換ストック分のマットを、母さんはその辺に適当に積んで置くのだ。父さんはそれがずっと気になっていた。「ヨシ！収める棚を作ろう」という訳で、一連の大工仕事。棚はスペースにうまく収まり、おまけに端材で小さな椅子まで作てパグのぬいぐるみを飾るという事まで。

母さんは内心おかしくてたまらないらしい。二人のために言っておくけど、からかいの気分ではなく、そんなことをしている父さんをほほえましく思っているんだよ、きっと。

私にすればよくイミが分らないし、こんなモンまたまた部屋が狭くなるだけじゃないかとばかり、父さんが折角きれいに棚に収めたマットをみーんな引っ張り出してやったんだ。

でも、それは三回までで終わり。「しょうがないなァ、華は」と言いながらマットを片付ける父さんを見て　「マ、イヽか、」

（以下 次号）